

再エネ利用可能量

太陽光（建物系）年間16万メawat時

釧路市と森林CO₂吸収量も算定
公立大

釧路市と釧路公立大学地域経済研究センターは、市内における再生可能エネルギーの利用可能量について共同研究を行い、住宅や建物に導入可能な太陽光発電（建物系）の量は年間16万345メawat時に上るという推計値を公表した。また、市内の森林による温室効果ガス吸収量の推計値を初めて算出した。

（荒井純）

バイオガス潜在力高く

地域特性や経済可能性を踏まえ、現実的に利用可能な再生可能エネルギー量を推計した。そのため、潜在的な利用可能量が多いものの釧路湿原周辺で生態系や景観、防災への影響が懸念される太陽光発電（土地系）や市内では事業化の壁が高い風力、中小水力、地熱は対象外とした。

太陽光（建物系）の利用可能量の内訳は、住宅に導入した場合が年間3万601メawat時で、公共施設や工

場などの建物は年間12万9744メawat時。木質バイオマス発電は、間伐材など未利用材を活用するシステムが確立されれば、年間3447メawat時になる。

また、循環型農業で重要な役割を果たすと見られるバイオガスパラントは、採算面で課題があるものの、市内の乳牛と肉牛の糞尿すべてを活用したと仮定すると、ガスコージェネレーションで年間1万8713メawat時、発熱量は年間5万455ギcalに上ると推計。地熱を活用したヒートポンプは、阿寒湖温泉地区の全宿

泊施設に導入した場合の発熱量を年間100ギcalとした。

一方、森林による温室効果ガス吸収量は二酸化炭素（CO₂）換算で年間19万6914トとなり、市の排

出量160万トの12・3%に当たると算定。地域別の吸収量は旧釧路市地区が6221ト、阿寒地区が12万5058ト、音別地区が6万5636トとなった。

中村研二センター長は

「牛の家畜糞尿によるバイオガスのポテンシャルが考えていたよりずっと大きいことが分かった。民家が点在する農耕地帯でいかに効率的に導入できるかが課題」と話している。

地域別の森林による温室効果ガス吸収量

区分	旧釧路市 地区	阿寒地区	音別地区	合計
面積(ha)	5,085	61,718	35,110	101,913
成長量(m ³)	4,680	92,442	50,388	147,510
吸収量 (t-CO ₂ /年)	6,221	125,058	65,636	196,914